日本における温泉保養地について

群馬県温泉協会副会長　中　沢　晃　三

日本には本格的な温泉保養地がないといってよい．原始的な日本の温泉地を見て驚いたのはドイツ人医学者東大医学部教授ベルツ博士であった．泉質・湧出量，還境共に抜群の素材をもち，その入浴法については世界に完絶している．併しその現状は不衛生，且つ原始的で西欧人の遊教に耐えない．ベルツ博士は伊香保を例として日本の温泉の改革案を時の政府に建白したのが日本鉱泉論である．明治13年のことである．

つぎに箱根の一大保養地の構想である．これは政府が取りよけるかに見えたか，つぶされてしまった．熱海・葉山・日光などつぎつぎとベルツ博士の指導による温泉，保養地の改革案が出されたがすべての温泉保養地の構想は実現を見なかった．ベルツ博士がかけたのは草津に於ける自身による一大温泉保養地計画である．併しこれも実現を見ないうちにベルツ博士は故国ドイツへ帰った．明治38年（1905）であった．ベルツ博士は東京大学医学部に１万マルクの基金を寄附し，日本の温泉研究の為に，特に草津温泉の研究を条件にした．東大医学部物療内科ではこれを受け継ぎ温泉医療の面では世界的にすぐれた業績を残した．併しベルツ博士の意図した温泉保養地の実現は継承されなかった．

ベルツ博士の意志に共鳴したのは田村剛博士であった．日本に国立公団制度をもたらし国民保養温泉の制度をつくった．併し，温泉地は全くこれらの先進者の考えとは逆に，戦後は，観楽地化してしまった．いま日本には温泉保養地はなくなってしまったといって良い．いま日本の温泉地は観楽化された温泉の不振に悩んでいる．一方，世界第１級の経済大国に躍進した日本は，その勤勉性が世界の経済に脅威を与え，貿易摩擦を各国と起している．いま国民に保養休養を与える温泉保養地の実現は，正に国是として取り上げるべき問題である．